

積算四方山話⑮

積算にはロマンがある

野呂 幸一

元 公益社団法人日本建築積算協会 会長

<筆者略歴>

1941年東京神田生まれ。1964年早稲田大学建築学科卒業後、大林組入社、本店（大阪）建築部積算課勤務。コンピュータの利用研究に着手、その後システム部門（東京）に転勤し、積算プログラムを起点に概算精算見積、原価管理、現場システム、施工図CAD、維持保全、企画プレゼンなどの開発に従事、情報ネットワーク、EDI、AI、CGなどの利用研究。1999年退社後、JCC総研設立、中堅・中小ゼネコンの情報化支援、クラウドシステム、e-ラーニングソフトの開発、IT教育にも尽力。

積算セミナーに参加

1964（昭和39）年、大阪の本店積算課に新入社員として配属されて1年半ぐらい経った頃、ある日、職場に回覧されたチラシ広告に目を止めた。

このような回覧は時々あり、新建材や新工法のパンフレットや関連団体による講習会の案内などがバインダーに挟まれていたが、その時は積算セミナーの案内であった。この積算セミナーは、民間のセミナー会社の企画で少々高めの料金となっており、講習会場は東京であった。

当時私は独身寮から通勤しており、東京の実家にはめったに帰れなかった。そこでこの講習会に参加できれば実家に帰れると思い、上司にセミナーへ参加したいと伝えた。

当然受講料以外に旅費などもかかるので断られると思っていたところ、上司は、意外にも「いいでしょう」と言ってくれたので少し驚いた。そこで早速申し込み、出張扱いで参加することになった。

積算セミナーは、その頃急速に関心が高まっていた積算業務にセミナー会社が目をつけ、多くの受講者を集められると考えて企画したものだった。講師は、新しく積算事務所を設立した社長さんたちであり、積算業務の役割や重要性について講演するという内容であった。私は、講演内容にも関心はあったが、久しぶりに実家に帰れることがうれしかった。

セミナーの受講者は、50名ぐらいでかなり盛況と言えた。講演は、午後から始まり、3名の講師がそれぞれ積算に懸ける想いを話していたが、最後に二葉積算の宮谷重雄氏の講演があった。

しかし残念ながらこの講演内容は、私の積算業務

の経験では理解できないところが多かったため、講演後演壇で説明資料を片付けていた宮谷氏のところに行き、2、3質問をした。けれども、またしても私の積算に対する認識が当時はあまりに浅かったためか、宮谷氏からの回答はよく分からないことばかりであり、納得できないまま引き下がってしまった。

再び積算セミナーに参加

その1年後、回覧で同じセミナー広告を見つけた。講演者の顔ぶれとテーマは、前年とあまり変わりはないが、東京の実家に帰れることもあり、再びセミナーに参加を申し込んだ。

前年のセミナーから1年が経ち、私は、積算について拾いの技術以外にも見聞を広めていたが、前回理解できなかった内容についても一度宮谷氏の話を聞いてみたいと思っていた。

宮谷氏の講演は最後にあり、かなり理解できるようになっていたが、やはり疑問は残った。そこで講演後すぐに演壇に行き「去年も同じような質問をしたのですが」と言って話しかけた。宮谷氏は、「君はしつっこいね。急いで行かなければならないところがあるんだよ」と言って足早に講演会場を出て行ってしまった。

その姿をポカンと見送っていた時、私の傍に寄って来た人がいた。後で分かったのだが、その人が、積算事務所の技研工務を設立した佐藤照夫氏だった。

「この後、宮谷さんを囲んでイッパイやる会があるが、君も来ないか」と言うので、「えっ、私なん

かが参加してもいいんですか」と聞き返すと、「ただイッパイやる会だから気にしなくていい。そこで宮谷さんと話したらどうか」とのことだった。

少々厚かましいと思ったが、宮谷氏に聞いてみたいこともあり、お言葉に甘えて連れて行ってもらうことにした。

積算事務所設立者たちの飲み会

佐藤氏に案内された場所は、新宿の「かにや」という日本料理店であった。既に何人が来ており、ビールなどを飲みながら大きな声で何やら話していた。私は、佐藤氏の傍らに座り、注いでもらったビールを飲みながら皆さんの話を聞いていると、宮谷氏が急ぎ足で入って来た。

「遅くなってすまん」と皆の顔を見回すとそこに私がいたので驚いたようだった。

「なぜ、君がそこにいるの」と聞かれたので「先程の質問の答えをまだ聞いていませんので」と言うと、「いやあ、まいった、まいった」と言って苦笑いした。

飲み会の参加者は皆さん、積算事務所を設立した社長さんたちで、40歳前後の血気盛んなメンバーだった。次から次へと話題は変化したが、積算事務所の協会立ち上げの話になると、喧々諤々、各自持論を展開しており、宮谷氏も熱心に皆さんの話を聞いては応えていた。私は宮谷氏と皆さんの会話に圧倒され、ただ聴き耳を立てているばかりで、結局この日も宮谷氏に質問の答えを聞くことができなかった。

積算事務所協会との交流

新入社員から3年経った1967（昭和42）年3月、私は東京に転勤となり、本格的に積算システムのコンピュータによる開発に取り組んでいた。

この年の6月、任意団体の日本建築積算事務所協会が設立され、四谷の古い木造のビルに事務局を設けて活動を開始した。

協会は、活動の一環として積算セミナーを開催することになり、私は、当時関心が高まっていた積算

業務におけるコンピュータ利用について何回か講演を依頼された。また協会は、1970（昭和45）年4月、月刊の会誌『建築と積算』を創刊することになり、私は「コンピュータによる新しい見積システムの研究」と題して6回連載することになった。

このようなこともあり、私は、日本建築積算事務所協会との接点が増え、協会の多くの人たちとの交流が始まった。

宮谷氏は、協会設立後、副会長に就任しており、時々、親子ほど歳の差がある私を誘って、前出の「かにや」でイッパイご馳走してくれて「積算にはロマンがあるんだよ」と積算に懸ける夢や大切さなどを話してくれた。

「かにや」に行くと、和服の似合う女将がにこやかに迎えてくれる。女将は大変美人で、一言二言、言葉を交わすだけで幸せな気分になった。

宮谷氏によると、この「かにや」は、かなり前に佐藤照夫氏と開拓した店で、毎日のように通っているとのことであった。最近「先生、ご趣味は」と聞かれると「水割りです」と答えているとか、こんなユーモラスな面もお持ちの方だった。

お酒が進むほどにたわいない話から積算へと移っていったが、積算事務所を開設した経緯やRICS¹に触発され、積算技術者の資格や建築数量の積算基準などの重要性を独特の口調で話してくれた。

宮谷氏の話は、戦後の日本における建築積算の隠れた歴史とも言えるほど大変興味深いものであり、いくつかを思い出しながら紹介したい。

ゼネコンを経営するがあえなく倒産

宮谷氏は、1941（昭和16）年3月、早稲田大学の建築学科を卒業し、卒業と同時に満州に渡り、戦争に巻き込まれ、1946（昭和21）年に復員している。同級生に著名な建築家の吉阪隆正氏がおり、親友であった。この関係で1975（昭和50）年7月、社団法

1 Royal Institution of Chartered Surveyors（英国王立チャータード・サバイヤーズ協会）1868年に英国で設立された、土地・不動産・建物分野等における国際的職業専門家団体。

人の日本建築積算協会が発足した時に、宮谷氏は吉阪氏に会長就任を依頼し、本人は副会長となった。

宮谷氏は、復員後、中堅ゼネコンに就職し、進駐軍工場の現場所長を務めていたが、この時、このゼネコンが突然倒産の危機に直面した。その結果、工事は中止となり、出来上がっていた6割の工事費を清算し、残り4割の工事を別のゼネコンに処理してもらうことになった。

しかしこの工事は、アメリカの軍の発注であり、工事費の清算に伴う出来高の査定は、アメリカ流の原価計算方式でやらなければならない、コンクリート工事ひとつとっても、仮設、材料、労務、運搬、経費など五つくらいの小項目に分かれ、積算作業は大変であったようだ。

宮谷氏は、所長として所員の協力で何とか1年ぐらいかけてこの作業を終えたが、積算なんて二度とするものかと思ったとのことだった。

その後、この中堅ゼネコンは倒産したが、宮谷氏は、ゼネコンは儲かると思い、建設会社を設立した。しかし考えが甘かったのか、資本金の10倍近い負債を抱えて、あえなく1年半でダウンしてしまった。

嫌々始めた積算

宮谷氏は、設立した会社があっけなく倒産してしまっただけで、1年近く雌伏した後、1956（昭和31）年に、友人と二人で設計事務所の二葉建築事務所を開業した。

社名の「二葉」は、東京タワーなどの鉄塔や耐震壁の構造設計者として有名な内藤多仲氏の命名で、「二人でやるんだから二葉がよかろう」とのこと、発想は単純だがなにせ大先生のご命名なのでありがたく頂戴したとのことだった。

ある日、事務所に親友の吉阪氏がやってきて、「前川（國男）さんや丹下（健三）さんなど有名な設計事務所が積算で困っている。お前は建設会社などで経験を積んだエキスパートなんだから助けてやれ」と言う。

宮谷氏は、こっちは設計事務所の端くれ、何

が悲しくて積算なんかと思ったが、吉阪の紹介じゃ仕方がない、渋々引き受けることになった。しかし、これが他の設計事務所にも知れ渡り、設計よりも積算の仕事が多くなってしまった。そこで設計の方は友人に任せ、積算部門を二葉積算と改名して1973（昭和48）年に独立したとのことであった。

紹介されたRICS

宮谷氏がRICSを知ったのは、著名な建築家の前川國男氏と市浦健氏のお二人からの助言による。

宮谷氏の話によると、1959（昭和34）年秋、仕事の打ち合わせで前川事務所に行くと、前川先生もおられて、宮谷氏を見て手招きされた。そこで、何事ならんと恐る恐る先生の机の前に座ると「宮谷君、君はRICSという大きな積算協会が英国にあるのを知っているか」と聞かれた。「全く知りません」と答えると「君が積算業務に専念するなら、調べておくといい」と言われた。

この頃、宮谷氏は積算を嫌々やっていたので英国の積算協会などには関心がなかった。ところがそれから2年ほど経ったある日、市浦建築設計事務所に挨拶に行くと市浦先生から「宮谷君、英国にRICSと言う積算関係の団体があるのを知っているか」と聞かれた。

そこで「前川先生から名前だけはお聞きしています」と答えると、「君が嫌でも積算業務に専念する時には、QS²という公認積算士が活躍しているこの団体が参考になるはずだ。君も一遍行ってみたらどうだ」と言われ、RICSについて市浦先生の見聞をいろいろ聞かされた。

設計界の大御所の二人から同じことを聞かされた宮谷氏は、少しはRICSについて調べてみようという気持ちになったようだ。

RICSを単身で訪問

調べてみると、RICSはなかなかの組織であることが分かった。そこで、とにかく一度行ってみようと思い、1964（昭和39）年に日本建築家協会からコ

2 Quantity Surveyor RICSの会員となり、付与される称号

ンタクトしてもらい、一人でRICSを訪ねた。

訪問してみると、国際的にも広範囲な領域で活躍するQSやそれを束ねる協会としてのRICSの活動を知ることになり、驚愕するとともに日本にもこのような団体の必要性を感じた。また英国の積算基準(SMM³)や数量明細(BQ⁴)に出会い、関係資料を持ち帰って翻訳し、仲間と検討したとのことだった。このSMMの翻訳は、その後、日本の建築積算基準の策定に大きな影響を与えている。

RICSとの触れ合いのきっかけが、設計界の二大御所の勧めから始まったことは興味深い。

私も1972(昭和47)年に積算事務所協会の面々とRICSを訪問した。これは協会として第2回目の訪問であったが、この時の団長が宮谷氏であり、RICSから歓迎を受けるとともに、宮谷氏の積極的な案内と解説によってRICSについて多くのことを学んだ。

羽田から出発する時は「かにや」の女将が見送りに来てくれて、宮谷氏は饞別として「梅干し」をもらった。後日訪問先のホテルで私は一粒ご相伴に預かったが、ロンドンで食べたあの「梅干し」は、日本食から遠ざかっていたこともあり、大変美味であった。

宮谷氏の2回に渡る訪問を契機として、その後、日本と英国の積算協会の交流が始まり、今日に至っている。

積算基準の策定

宮谷氏は、英国の積算基準(SMM)を見て、我が国にもその必要性を強く感じ、その策定に関係者に働きかけていたが、ようやく1970(昭和45)年に官民合同の積算研究会が正式に発足した。

しかしこの時、宮谷氏が気にしていたことは、業界、ゼネコンサイドの対応であった。ゼネコンサイドの全面的な協力なくしては基準づくりは無意味だと考えていた。ところが当初、ゼネコンサイドは、諸官庁の発注サイドと意見が対立していた。しかし

ながら、1、2年経つと全く驚くほどに協力的となり、研究会をリードするほどになった。ゼネコンサイドの委員は、「もう数量で発注側とやり合うのは御免だ。多少のことは構わない、早くまとめたい」と言っていた。

宮谷氏は、この豹変には驚いたそうだが、結果はうまく行って上々だったと笑っていた。

積算とロマン

宮谷氏が1991(平成3)年3月、73歳で亡くなった後、日本建築積算協会は、宮谷氏の遺稿集をその年の7月に出版している。書籍のタイトルは、『積算とロマン』となっているが、これは生前の宮谷氏が、はにかみながら使う言葉であった。

編集は、日本建築積算協会の会誌『建築と積算』の編集を手掛けていたエディック社の中井千文氏によるが、収録された著作等は、『建築と積算』に掲載されたものである。

『積算とロマン』は、4章で構成されており、第1章は「論」として、宮谷氏の積算に関する考え方が掲載されている。第2章は「感」、年頭や総会の挨拶で述べられた所感となっている。第3章は「話」で、会誌の『建築と積算』に12回にわたって連載された「せきさん12話」。最後の第4章は、「談」で、対談やインタビューが掲載されている。

中井氏は、編集後記で宮谷氏にインタビューした際、「ミスター積算」と書いてもいいですかと聞いたとのこと。その時、宮谷氏は苦笑されて、「僕は、本当はデザインをやりたかったんだよ。積算は皆によってたかってやらされたんだ。設計事務所は積算に弱いから、こっちにお鉢が回ってきたのがきっかけで、積算が本職になっちゃった」と言ったと記している。

宮谷氏は、今思い出すと大変恥ずかしがり屋であり、ロマンチストであった。しかし、今日の積算業務や専門の積算事務所の基盤を形成した立役者であり、今なおその精神は受け継がれていると言えよう。

3 Standard Method of Measurement 英国の標準建築数量積算基準

4 Bill of Quantities 数量明細